

瘧論篇 第三十五

三十一

黃帝問曰。夫山瘧瘧は皆風乎。其の書作

於時有之何也。岐伯對曰。瘧之始也。發於子也。

及之毫毛。子起。仲夏。寒慄。鼓頷。腰脊俱痛。其夫山瘧。則外皆熱。頭痛。破之如渴。為之冷飲。飲之。

帝曰。何の氣の然之使也。願之。其之道之聞也。

岐伯曰。陰陽は上下。子。午。辰。戌。庚。辛。作。

三十五 一

三十五 一

陰陽相校也。陽。陰に并ふは則ち陰重。一之陽は

虚す。陽明虚すは則ち寒慄。鼓頷す也。正陽

虚すは則ち腰背。頭項痛也。三陽俱に虚すは

則ち陰氣勝り。陰氣勝るは則ち骨寒。之痛也。

寒は内より生ず。故に中外皆寒也。陽盛にして外

熱。陰虚せば則ち熱。一。外内皆熱すは。則ち

喘渴す。故に冷飲と欲す也。

三十二

此山瘧。子。午。辰。戌。庚。辛。に傷るるに得ず。熱気盛んは山

三十五 一 二

皮膚の内、腸胃の外に藏る此の榮氣の合子所なり。

此の人と一と汗空を疏なる合子、腠理開く、因て秋氣を

得、汗出て風に過み、及んで之を、浴かすに得る

水氣皮膚の内を令り、衛氣と與に科るなり。衛氣は

晝日は陽を行り、夜は陰を行ふ此氣、陽を得て外へ出

陰を得ては内に薄し、内と外と相ひ薄り、是れ以て日に

作す。

II

而白く、この間日と作すは何ぞや。故に白く、其の氣の

三十五 一三

合子と深く、陰に内薄す、故に陽氣獨り發す。陰邪、

内に著く、陰と陽と争ひ、出づるを得ず。是れ以て間日と

作す也。

III

而白く善いと。其の作すに、暑、其の、日々に、

何の氣の然し使ふ。故に白く、邪氣、風府に著、

循りて下の衛氣は一日一夜にと風府に大會す。其れ

明日、日に一節と下の故に其の作す也、思ふなり。此れ皮を

脊背に著す也、風府に著す毎に、腠理開く、腠理

三十五 一四

開りば則ち邪氣入り邪氣入らば則ち病作らば此以て  
目には作らば（少）稍々益々多き也（邪氣）其の風府より出づる日は一節  
を下よ三十五節と下る、龍骨に是れ二十六日に脊の骨のり、  
内から伏脊の脈に注ぐ。其の氣上行するに九日に止む。故  
盆の中より出づ。其の氣、日に高く高し。故に作らば日に  
く益ますます多き也。其の間日に止むるは、邪氣の内  
か下五藏（積連する蒸原に薄る）より也。其の益は

流く、其の氣は深く、其の行くに遠く、衛氣と俱に行く  
三十五 一五

IV

之能は初。背出づるを得ざるに故に間日にと及（作らば）也。

帝曰く、夫子言ふ、衛氣、風府に至る毎に晝夜及らば、  
發ければ則ち邪氣入る。入らば則ち病作らば、今衛氣、日に下り  
一節に止む、其の氣の發く也。風府に當るに、其の日に作ら

は奈何。岐伯曰く、此れ邪氣、一頭項、客し、脊骨を循りて、  
下山也。

故に虚實は同ならず、邪、異所に中山は則ち、其の風府に

當るを得ざる也。故に邪、頭項に中山は、氣も頭項に是れ

病あり。背に中山は、氣も背に去りて病あり。腰脊に中山は、氣も

腰脊に去りて病あり。手足に中山は、氣も手足に去りて病あり。

衛氣の在る所、邪氣と相合すれば、則ち病を作ふ故に

風は常府無く、衛氣の盛る所は、必ず其の腠理を開く。

邪氣の合する所は、則ち其の府有り。

□ 中曰く善しと。夫れ、風の瘧に變くや、相合似て同類なれ

ども、風は獨り常に存り。瘧は時有りて休むを得ずは

何のや。岐伯曰く、風氣は其の處に留まり、故に常に存り。

三十五一七

瘧瘧は經絡に隨いて次々、以て内に薄み、故に衛氣應

して乃ち作ふ

□ 帝曰く、瘧の発が無之と。而も後に熱するは何のや。岐伯

曰く、夏は人居るに濕り、其の汗大に出で、腠理を開き、

夏氣の凄冷う水に遇ふに因りて、暑、腠理、皮膚の中に

藏り、秋に風に傷らるるときには、則ち病成り、夫れ、暑は陰

氣なり、風は陽氣なり。夫れ、暑に傷み、而も後に風に

傷らるるに、夫れ、寒へ、而も後に熱する也。病は時を以て

三十五一八

作の在りて曰く瘧瘧と

帝曰く及ぶ熱し而も後に寒とするは何ぞや岐伯曰く此は  
先ア風に揚山而も後寒に揚るる故に及ぶ熱し而も後  
寒の中也亦、時を以て爲る、在りて曰く温瘧と

其の但に熱し之寒からざるは陰氣及び絶之陽氣稍り  
殺すれば則ち少氣と煩冤し、手足も熱し之嘔はんも故  
あり在りて瘧瘧と曰ふ。

二十五、九

四

經に曰く

帝曰く夫れ餘り有らば之を瀉し不足は之を補ふ今熱は存  
餘と爲し寒は不足と爲す夫れ瘧する者寒は湯火も能く

温むるあたはす其の熱するに及べば氷水も能く寒やするあたはす

此は皆有餘不足の類なり此の時に向つては良工も止むる能はる

也其の自之寒ふるを須く及ぶるを利す其の故は何ぞや願は

くは其の故を問ひ岐伯曰く經に言ふ瘧瘧の熱は利する瘧は

渾渾の脈は利する瘧は瘧瘧の汗は利する瘧は故に其の病の

道有るは未だ治す可からざる也

三十五、十

Ⅶ

夫れ瘧の始より發する也。陽氣は陰に秤す。是の時こほに當りて、  
 陽虛一之陰盛なり。外に氣無し。故に皮を寒慄する也。陰氣  
 逆之極すれば則ち溪ひ之を陽に出す。陽と陰と溪ひ外に秤  
 する山。則ち陰虛陽實なり。故に皮を熱しと爲す。夫れ瘧  
 氣は陽に秤すれば陽勝り。陰に秤すれば則ち陰勝り  
 陰勝れば則ち寒之。陽勝るときは則ち熱す。瘧は風寒の氣の  
 常なる也。病極すれば則ち溪ひ至る病を發する也。火の  
 熱の如く。風雨の如く。當り可からざる也。故に經に言ひて曰く、

三十五 十一

Ⅷ

其の盛なる時は必ち致つ。其の衰するに因る也。事火す  
 大湯なりとは此の謂也。夫れ瘧の未だ發せざる也。陰未だ陽に  
 秤さざる。陽未だ陰に秤さざる。因る之を測る山。其氣  
 安を得て邪氣は止むに及ぶ。故に工。其の已に致するを治す  
 能ふは、其の氣逆を爲す也。  
(蓋理を同じとすまう)

帝曰く喜し。之を攻めずは奈何。平家は何如。岐伯曰く、  
 瘧の且に致する也。陰陽も且に移るとす也。必ち四末より  
 始する也。陽已に傷み。陰之に従ふ。故に皮を其の時其の處をは、

三十五 十二

㊦

聖東、邪氣と入り得たり、陰氣と出たり得たり、  
之を審ふに候見、脈絡の盛衰一と血在るに皆之を取ら  
此の直に往きて、未だ料さざるを得ざる者なり。

帝曰く、瘧疾を其の應は、何、岐伯曰く、瘧疾は此より更  
盛し、更なる瘧疾の在る所に留り也。病陽に在るときは則ち  
熱して脈躁なり、陰に在るときは則ち寒して脈靜なり。

極く小は陰陽俱に衰之、衛氣は相離り、故に病、休むと  
得、衛氣集るときは則ち復た病也。

三十五一十三

㊧

帝曰く、時に、二日或は數日に至る間、有りて發す、或は過し、或は  
過せず、其の故は何也、岐伯曰く、其の間日するは、邪氣と衛  
氣との間に容れ、時に相失り、相得る能はざるが故に、休  
む、數日に至る、作也、瘧とは陰陽更々轉る也、或は甚  
しく、或は甚くか、故に或は過さ、或は過らざる。

㊨

帝曰く、論に言ふ、夏に暑に傷らば、秋に必し瘧を病むと、  
今、瘧、必ずしも應せざるは何也、岐伯曰く、此れ、四時に應れり  
者なり、其れ病の形を異にするは、四時に反する也、其の秋と

三十五一十四

以て病の者は寒なり「甚し」を以て病の者は寒なり「甚し」か  
春を以て病の者は風を惡む夏を以て病の者は蚊を惡むなり。

XVII

帝曰く大い温瘧と寒瘧とを病むは皆交々に合り何の藏に合  
か岐伯曰く温瘧は之を風の中りて得る寒瘧骨髄の中に  
藏し春に至れば則ち陽氣大いに發し邪氣は自ら出づる能はず  
大者に過ふに因りて腦髓燥り肌肉消へ夫理發也或いは  
力を中より所有りて邪氣と汗と皆出づ此の病は骨に藏す  
其の氣を内より出て外に之く也是の如き者は陰虛陽盛

三十五 一十五

なり之陽盛なるときは則ち熱す衰ふれば則ち氣復ひ入り  
入れれば則ち陽虛一陽虛せば則ち寒なりなり故に先づ熱して  
後に寒なり在りて温瘧と曰ひ

XVIII

帝曰く瘧瘧は何如瘧瘧とは肺に素より熱有り氣は身に  
盛なり之故に上衝し中氣は實し外に泄れず力を固し  
有るに因りて腠理開き風寒皮膚の内分肉の間に合りて發す  
發するときは則ち陽氣盛なり陽氣盛なりて衰へば則ち  
病むなり其の氣陰に反りて之の故に但だ熱して寒せず

三十五 一十六

